平成 20 年 9 月 17 日作成
（第 39 号）

ホツマツタヱ「ゆかりの地」を歩く
大和の道とヲヲコの御魂神を訪ねて （その２）

吉　田　六　雄

大和の道へ

古代日本の神々は「神話」の話と考えられているため、一般的には「神々」の素性がわからなくなっている。まして我が国の歴史書である「古事記」などでは、古代天皇である「スメラギ」の系図を中心に記載されているため、スメラギを支えた「オオナムチ」以外の歴代大物主などは抹消されている。だが現実を見ると「大神神社」の祭神は「大物主大神」となっており、「大神」の表現は独り神でないことを表していた。このことからもわかる様に「大物主大神」とは、第 2 代目大物主～第 6 代目大物主までを云うことがわかってきた。

一方、古事記に記載されていた大物主の「オオナムチ」は、「大物主大神」に入ってなく、配神の「大己貴神」と記載されていた。この様に古事記に記載されている「大物主」だけ見てもわかる様に、古事記の記述が余りにも貧弱であることがわかってくる。私もホツマツタヱに出会うまで、古本の古代の神々を知らずに過ごしてきたが、ホツマツタヱを知ってからは、有り余る「真実の歴史」に触れてきた。そんな中、古代に「天孫・ニニキネよりヲコヌシ神を賜ったクシヒコ」にお参りして、「大和の道」の神髄がわかればと、大神神社へと出かけていた。

クシヒコの家系

大神神社に「大物大主神」として祭られているクシヒコであるが、その父君は、「クシキネ」こと「オオナムチ」である。現在青森県弘前市百沢寺沢の岩木山神社に「ウツシクニタマ」と云う名前で祭られている。祖父は出雲神話で有名な「ソサノオ」である。母はアマテル神の 8 人の子供の一人で、タケコである。現在でも琵琶湖の沖津島に祭られている。また祖母は「ハヤコ」である。そのハヤコは、アマテル神の 12 人の妃の内の 1 人で、北の局の②「ウチメ」の位の「ウチキサキ」の位であった。この様にクシヒコの家系は、祖父、祖母、父、母とも、現在に直すと「宮家」に関係する家柄である。当然クシヒコも、アマテル神の天孫の「ニニキネ」に大物主として仕えた。そんな中、タカミムスビが心配して「汝、大物主のクシヒコよ　国を治めるとなると妻が必要であろう　わがミホツ姫を妻にして　八十万神々を掌握して　天孫・ニニキネの守りに精出してくれ」とのタカミムスビの大御言に従った。

(注 1)アマテル神の妃について
アマテル神には 12 人の妃がいて、その妃は東西南北の局に①「スケ」②「ウチメ」③「オシモメ」の 3 人が配置されていた。またもう一人「聞姫」がいた。この様にアマテル神に 12 人の妃がいたことからも、わかるように当然男性である。アマテル神を「女神」とした文献は、現在の表現を使用すると「偽証」である。

クシヒコが仕えたニニキネ

クシヒコが仕えた「天君」のニニキネについて述べると、アマテル神の孫のため平々凡々に過ごせたかと云えばそうでなかった。ニニキネには、「クシタマホノアカリ」という長男がいて「飛鳥親君」として先に「オシホミ」より「天日嗣」をしていた。次男であったニニキネは後に「オシホミ」のあとを「天日嗣」するが、今の関東平野の新治を中心に、未開の土地を開拓して「稲作」を奨励して歩いた。その活動は関東平野に止まらず、伊勢の高野田を開拓し「高田」で

も稲作ができるように開墾するなど苦労の連続であった。その「国土開拓」の功績により「天君」の位を「天日嗣」することができた。そしてこの間は、クシタマホノアカリとニニキネの2つの朝廷を持つ、所謂「2朝廷時代」が続いた。このようなニニキネは古代天皇の称号である「スメラギ」を最初に授けられた「初代のスメラギ」であり、また「イサナギ・イサナミ」の二神から「逆矛」の讃え名を賜ることもできた。

大和の道とは

「素直な気質を貫くこと。また生まれながらに素直のこと。」と故・松本先生は解説していた。だが単に「素直」や「率直」では国は治まらないことは誰でもが知っていることである。やはり素直や率直が発揮できる「天君」があってのことである。その点クシヒコには、ニニキネと云う国土を開拓してあるいた立派な天君がいたからこそ「素直」や「率直」が発揮できたと思う。このことは、現在社会の「国の行政」、「官庁」や「会社」でも同じことと思える。究極は、大和の道を発揮できる天君的な資質をもった上司や年輩者が必要ではないだろうか。それにしても、現在の「大和」の意味と違っている。現在では「大和魂」とか、「勇気を必要な時」の言葉になっている様だ。その言葉は近代の暗い歴史に悪用された「大和魂」であるが、本来の「大和魂」は「率直な気質を持った頭脳と身体」と訳するのが正しい様だ。

秀真（ホツマ）なる時

それにしてもクシヒコが治めた国は、「国民」が幸せだった。このことは、次の「ホツマツタヱ」文献の23-94～98文「御衣定め　剣の文」より察することができる。その文の初めは、「ニニキにお言葉があった　ニニキネ、クシヒコを始め、ホツマ国を治めるニニキネの臣よ。家臣全員が国民のことを考えて、手を抜かずしっかり頑張るのですよ。皆さんの政治が包み隠さず素直な政治を行うことで、国民は安心して暮らせるのですよ」

23－94～98文（直訳文）

	また皇孫に
勅り	汝ら政
怠らず	秀真なる時
八民安ふらん	
クシヒコは	大和山辺に
殿造り	世お考えば
歳既に	十二万八千も
極あれば	後の守りは
トヨケ法	魂の緒入れて
スヘラギの	世々守らんは
天の道	ミモロの山に
洞掘りて	天の逆矛
さげながら	入れて静かに
時お待つ	直ぐなる主お
見分けんと	直ぐな印の
杉植ゆる	ヲコの御魂の
神はもと	

23－94～98 文（訳文）
　またニニキネ(皇孫)に、おおせがあった。スヘラギの皇孫らよ。良く聞けよ。アマテル神より授かった「政り」をなまけずに、民を治すことで「誠の世」になる時が来る。その時はスヘラギの民の皆が、安らかになることであろう。第二代目の大物主のクシヒコは、奈良・大和の山辺に殿(大神神社)を造り、スヘラギ(天皇)の行く末を考えれば、御歳すでに 43 歳になる。そのクシヒコが云うには、私の命が尽きることがあれば、後の守りは「トヨケ法」即ち、トヨケ神が確立した「行き来の道」(転生の思想)に従い、スヘラギの代々を守って行ってほしい。この様に代々のスベラキを守って行くことこそが、天の道である。私はもうすぐ余命が尽きることと思うので、殿造りした三輪山のすそ野に洞を掘り、天の逆矛を御身に提げながら、洞に入り静かに神上がり時を待つこととなる。

　それにしてもスヘラギの守護神となり得る人は、守護神としての心得が必要である。それの心得は「素直な心の持ち主であらねばならない」からして、良く見分けが必要である。その素直な証拠として「幹が真直に育つ杉」を植えることが、素直な心の持ち主の証であり、このことが「ヲコの御魂の神」の基である。故に、大国の御魂神を祭る古い神社には、杉の巨木が沢山植えられている理由が、このことで　わかって頂けたと思う。
そして我々はこのことを良～く認識して、後世に伝えて行く必要があり、伝えて行かなければならない。
(注)天の逆矛とは、三種の神宝の一つの剣にもなっており、主に司法を意味する。

直ぐな印の　杉植ゆる
　大神神社にお参りして少し境内を歩くと、拝殿や祈祷殿の周りに、数多くの大きな杉の木が育っているのに気づく。この大神神社に「杉の木」が育っている理由は前訳文にも記したが、大和の道を貫いたクシヒコの思いを「杉の木」に託したのであろうか。スヘラギの守護神であったクシヒコは、「自分はもうすぐ神上がりしてしまう」ため、将来のスヘラギの守護神になる人に託したのであろうか。
　その一文が、「スヘラギの守護神となり得る人は、守護神としての心得が必要である。それの心得は「素直な心の持ち主であらねばならない」からして、良く見分けが必要である。その素直な証拠として「幹が真直に育つ杉」を植えることが、素直な心の持ち主の証であり、このことが「ヲコの御魂の神」の基である。と説いていた。この思いを私は「故に、大国の御魂神を祭る古い神社には、杉の巨木が沢山植えられている理由が、このことでわかって頂けたと思う。」と訳した。

　大神神社の境内の有名な杉の木は、拝殿前の広い境内の右側に「巳の神杉」がある。この杉は根子より 2mくらいのところより二股に分かれている。この 2 股はクシヒコの思いと少しは違うかもしれないが、2 本の杉は直線に大空方向に延びていた。このことでクシヒコも少し安心してくれるだろうか。
　それにしても「あるインターネットのＨＰ」に、次の一文を見つけた。「杉の木とこの神社との間には少なからぬ因縁があるのでなないかと思われる」と、この文章を読みながら、早く「ホツマツタヱ」文献と出会ってくれたなら、この疑問は解けるのにと思ってしまった。この杉の木の思いは、横浜の郊外に住んでいる私の町の十二神社にも届いていた。十二神社の祭神は、大和大国魂神となっている。また拝殿の周りには、大きな杉の木が 10 本程度あった。この様に「神社の杉」もクシヒコの思いのである「大和の道」「直ぐな印の杉」を発信としたできごとであったとは、驚くことばかりである。

大神神社のご由緒と検証

　大神神社のご祭神について、前号で説明したが、もう一度説明すると、「案内版」には、次の通り記載されていた。

　大和国一ノ宮
　三輪明神　　　大神（おおみわ）神社
　御祭神　　　　大物主大神（おおものぬしおおかみ）
　配　神　　　　大己貴神　（おおなむちのかみ）
　　　　　　　　少名彦神　（すくなひこなのかみ）

「当神社は、秀麗な三輪山を神体山とする我国最古の神社で、・・（あと省略）」

　ここの大神神社のご祭神はあくまで、「大物主大神」であり、「大己貴神、少彦名神」は、配神となっていた。そして私の理解もホツマツタヱ文献より解釈して、「この大物主大神とは第 2 代～第 6 代大物主を指しており、初代大物主の大己貴神は、ご祭神ではなくあくまでも配神・添神の立場であった。」と判断した。
　一方大神神社の小冊子の「ご由緒」にはどのように記載されているか、小冊子を広げて見た。すると小冊子には「遠い神代の昔、大己貴神（大国主神・オオクニヌシ神）主神が自ら幸魂・奇魂（すなわち和魂）を三輪山にお鎮めになり、大物主神（詳しくは倭大物主・クシミカタマ命）の御名をもってお祀りされたのが当神社のはじまりであります。・・・（あと省略）。」と記載されていた。比較検証すると、案内板にあった大神神社・御祭神の大己貴神は、配神であったのに対し、小冊子の「ご由緒」の記載では、「遠い神代の昔、大己貴神・・」と説明されていた。このことから小冊子の説明では、主役のご祭神になってしまうが？と思いながら小冊子を読んで行った。
　また次ぎに「大国主神」の振り仮名では、「おおくにぬしかみ」と記載されていた。そのことをホツマツタヱ文献では「ヲコヌシ神」と記載してあり、漢字に置き換えた時に「大国主神」と置き換えられた神であった。そして「ヲコヌシ神」は、第 2 代目大物主のクシヒコが賜った名であるが、小冊子では初代大物主の大己貴（オオナムチ）のこととして記載されていた。

　ここまで説明してくると、すでに皆さんもお気付いているでしょうが、日本の古代の神々の大国主（オオクニヌシ）、大物主の関係が、大己貴神の一辺倒の説明になり「平板的」な歴史になっていることに気づくでしょうか。ホツマツタヱ文献では「大物主」は官職として、大己貴神～2 代目大物主（クシヒコ）～5 代目大物主（フキネ）～6 代目大物主（クシミカタマ）までが存在しており、大神神社のご祭神も「大物主大神」と記載されている。この「大神」の表記については、複数神であることは先に説明したが、この事例は、全国の神社の御祭神を見て頂けると納得ができると思う。それにしても、私どもホツマツタヱ研究者と見ると、この大神神社は「ホツマツタヱの原点」と思っていたが、既に古代「ホツマツタヱ」の記録が、大神神社からも失われていた。今回の「ホツマツタヱ　ゆかりの地を歩く」は、それを証明する旅になっていた。

大三輪のうま酒

　拝殿よりの帰り道に大神神社の若武者が、「大神神社のうま酒」を売っていた。それも美味しそうに。なるほどと唸ってしまった。この「うま酒」の記載は、「ホツマツタヱ」文献の通りであった。その記載は「ホツマツタヱ」文献の「神崇め疫病治す文」に、「高橋イクヒ　神酒造り　三輪大神に　祭る　その味うまし」と記載されていた。

若宮社

　方向的には拝殿より境内を西北側に歩くと、大きな広場の東側に祈祷殿がある。その向かい側に「大神神社の宝物収納庫」の名前の「神社の宝」を展示している数寄屋作り風の建物があった。ここには三輪山の禁足地よりの出土品の「杯（つぼ）」や「坩（つぼ）」があった。また山の神祭祀遺跡より出土品した「匏（ひさご）」等の数多くの出土品が展示それていた。また壁には実物を展示できない宝物や山の神祭祀遺跡の写真を展示していた。

　その一つに「大直根子神社（若宮）」を目にした。今回の目的は大神神社であったため、実のところ「オオタタネコ」の神社があるとは思ってもいなかった。この大直禰子神社の写真を発見した時は、嬉しくなった。また反面無計画を反省してしまった。

　そんな理由で次の目的地は、ホツマツタヱ文献の 29～40 文の作者である「オオタタネコ」の若宮社にした。若宮社は大神神社の正門を出て、右に行くと山辺の道（道幅 4m弱）の通りである。その道を右に折れて、そのまま 50mほど真っ直ぐに行くと正面に「若宮社」が見えた。

大直禰子神社

　若宮社（検証ホツマツタヱ 39 号表紙の写真参照）は山辺の道より少し高く、階段の数は 17～20 段はあったろうか。登り切った所に鳥居があり、鳥居越しに見る若宮社は、一瞬「オヤ」と思う。正面より見た神社の外観は、お寺であった。境内の中央に敷かれた石畳を通り、拝殿に近づくと、右側に「将棋の駒形」の案内板があった。案内版には、次の通り書かれていました。

大直禰子神社（若宮）
　御祭神　大直禰子命（大田田根子）
　配　祀　少彦名命
　　　　　活玉依姫命

「御祭神大直禰子命は、御本社大物主大神の御神孫で第十代崇神天皇の御代、神託によって茅渟県陶邑（ちぬのあがたすえむら）より大神神社の初代神主として召されました。大神氏の始祖であります。この神社は、奈良時代には大神寺、鎌倉時代には大御輪寺として、本地仏十一面観音（現在国宝・聖林寺安置）と併祀されていましたが、明治の神仏分離以降は大直禰子神社として祀られており、社殿は国の重要文化財に指定されています。・・（あと省略）」。

　これでやっと、神社であるのに、お寺の作りをしていた理由がわかった。それにしても、奈良時代以降のこの神社の変遷に耐えて、現在まで「大直禰子」を祀る神社が存在していたことに感謝した。そして大田田根子神社にお参りし、「ホツマツタヱ」を書いて戴いたお礼と、「検証ホツマツタヱ」連載のお礼を申し上げた。

（注）オオタタネコは、ホツマツタヱ文献の 29～40 文の作者であり、そのため説明文も膨大になるため、訪問記のみに留めた。そのあと、大田田根子神社を後にして山辺の道にある「景行天皇稜」へと急いだ。大田田根子神社から景行天皇稜までは、約 2.5ｋmは有にある。ざっと自分の足を計算すると到着は、約 40 分後になる。大田田根子神社より先の山辺の道は、なだらかな坂道になり 40 分はつらいなあと思いながら歩いて行った。すると大田田根子神社より 200～300m歩いた左側に「久延彦（くえひこ）神社」と書いた案内板を目にした。

クヱヒコ神社

「クヱヒコ」どこかで聞いたことのある名前であるが、思い出せない。案内板には、次の様に書かれていた。

学業の守護神
知恵の大神　末社　久延彦神社
御祭神　　　久延昆古（クヱヒコ）命
御由緒　　　御祭神久延彦の神は、居ながらにして
　　　　　　世の中の事をことごとくお知りになって
　　　　　　おられる知恵の大神であります。
　　　　　　御本社の祭神、大物主大神、少名彦大神と
　　　　　　同時に出現せられ、神代からお静まりに
　　　　　　なっておられる神様です。

案内版の奥には大三輪独特の鳥居で、左右に柱がありその間に、少し大きな綱状の注連縄が飾ってあった。その鳥居の向こうの50mくらい先に次の鳥居が見えたが、この時点で「久延彦」の所在が掴めずに、ご参拝を見送った。

（注）
その後、横浜に帰ってホツマツタヱ文献を調べたところ、ホツマツタヱに1回だけ名前が登場するが、忘れていけない神であることがわかった。その「クヱヒコ」をホツマツタヱ文献より覗くと、現在でも「知恵の神」と祭られる根拠があった。そのクヱヒコが「知恵の神」と云われた理由を、ホツマツタヱ9文「八雲打ち琴作る文」より説明し、クヱヒコに捧げたいと思う。

9-37～38文（直訳文）
　　　　　　クシギネ淡海の
ササ崎で　　かかみの船
乗り来るお　問えど答えず
クヱヒコが　カンミムスビの
千五百子の　教えの指お
洩れ落つる　スクナヒコナは
これという

9-37～38文（訳文）
大己貴の諱はクシキネである。そのクシキネは淡海（現：琵琶湖）の湖畔にあるササ崎で、家臣と一緒に淡海の遠方を眺められていた。すると舳先に鏡をつけて、船を操作して近づいて来る者がいた。クシキネは家臣に対して、「あの者は誰だ」と問われたが、誰一人して即答できる者がいなかった。その家臣の中から1人だけ答えるものがいた。諱を「クヱヒコ」と云った。そのクシヒコの説明はあっぱれであった。「あの者はカンミムスビ（第6代目タカミムスビのヤソキネ）が教える1500人目の子供にも入らない、「スクナヒコナ」と云います」と答えた。

このクヱヒコの優れた頭脳は、現在「知恵の神」として山辺の道に祭られていた。このように「ホツマツタヱ」文献には知恵の神として祭られた「古代の偉人」が数多くいて、既に「検証ホツマツタヱ」でも紹介した阿智の神として祭られている「オモイカネ」もその一人であった。

山辺の道

　山辺の道。「山辺の道」は古代ロマンの宝庫とは聞いていたが、「クシミカタマ」、「オオタタネコ」、「クヱヒコ」そして、今回原稿にできなかったが、前方後円墳に祭られていると云う「ヤマトモモソ姫」を訪ねることができた。ヤマトモモソ姫の前方後円墳は、すごく大きく、とっさに造営年数を推測して見た。恐らく4～5年は経ったろうかと思えた。最近の新聞ではその裏付けの様に、外周にお堀があったことを報道していた。

（おわり）